

秋の登山シーズン真っ只中ですが、お元気で山行続けられていることでしょうね。私、最近はなかなか出られなくて、くろゆりクラブの方もご無沙汰。主人の時間のある時のみ、ほんとうに寂しい思いです。せめてもと思い、深田久弥の「百名山」の本、ビデオを見て、山に登ったような気持ちになって楽しんでいます。夏の追われに群馬に行く機会があり、上州武尊山に登ることができ、至仏山、巻磯山etc 一遠く望め、感激致しました。

先日図書館で偶然「分県登山ガイド石川県の山」に出会い、昨年執筆されていたことを思い出し、早速読ませていただきました。貴女と坊やのお写真を所々に見つけ、とても分かり易い解説に何度も読み返し、嬉しく思いました。

本当にご苦労様でした。大変でしたね。益々ご活躍されます様、お祈り致します。



オオアカゲラ

大学を卒業してから一十年になります。懐かしい学生時代を振り返ると、ワンゲルでの山歩きでは一山の風、土の匂い、木の香り、草木の花の香りと色合い等々、五感で楽しんだものでした。

私がいたころのワンゲル部はどちらかと言えば、ひたすら歩くことにポイントが置かれていたように思います。私はといえば、どんどん歩くより、道草をしながら、周りの木々、野草、動物達に会えるのが楽しみでした。高山植物が厳しい自然の中でも、頑張って花を咲かせている姿を見て、ある種の尊敬さを感じたものでした。

昨今、時間は急速に進み、「人は何のために生まれてきたか」と考える時間をも奪いつつあります。我々が生きている地球を、「便利だ、便利だ」と開発という名のもとに、どんどん破壊する文明を押し進めてきたように感じます。

便利で快適な生活は、自然と人間社会の深い関係を知らないで、どんどん自然破壊を進めていくのではないのでしょうか。

そのため、あちこちで自然保護運動が起こっていますが…。

人間も自然の一部、母なる自然は、生きるためのさまざまな智慧を与えてくれます。

山、海、と遠くへ出掛けていなくても、私達の身の回りをみまわして、お世話になっている地球さんに少しでも恩返しをしたいものです。

そんな気持ちで自然解説員（の真似ごと）をしています。

自分を好きになると、世界も好きになれる
生きていることを喜べるようになる

鳥や、花や、虫や

山や、空や、風に揺れる木々も

同じ時を生きている仲間として大事にしたいと。

3年間の「ベルクハイム」編集作業で培った技術を生かすべく、新聞社に勤めて23年。このうち18年間を新聞記者、編集記者（内勤、いわゆる整理）として編集局で過ごしましたが、5年前に出版部へ異動となり、現在は営業局の営業企画部というところにいます。肩書も「記者」から「ライター」へと変わりました。

新聞社の営業局というのは新聞収入の大黒柱である広告を扱うセクションであり、営業企画部は、第一線部隊の広告部をサポートし紙面化する企画・制作部門にあたります。毎日の仕事が「原稿を書く」ことであるのは記者とさほど変わらないのですが、読者のために書く、というよりはむしろスポンサーのために書く、というところが記者との大きな違いでしょうか。

そんな私に、編集局長より怖い事務局長から「原稿を書け」との命令です。読者諸兄を感動させる話など書けるべくもありませんが、日常業務の一端をご紹介しますことでお許しいただければ、と思います。

広告（に限りませんが）はスポンサーが持ってくるのを待っているだけでは数字が上がらないので、いろいろな企画や特集をでっち上げて、協賛を募る（セールスをする）わけです。「〇〇の日」とか「高校同窓会シリーズ」とか「〇〇町40周年」とか「祝／浅蔵五十吉先生文化勲章受章」とかタイトルを付けて、記事（広告ではカットといいます）の下に名刺広告をずらっと並べるのが代表的でしょうか。

これらは「純広」（スポンサーの純粋な広告）に対して企画広告といいますが、日々の紙面を見ていただくと「よくもこれだけあるものだ」というぐらい、さまざまな広告が紙面を飾っています。「広告ばかりで読むところがない」と言うなかれ。広告も、りっぱな情報なのですぞ。

それはさておき、本体に収容しきれない場合には「別刷特集」という形を取ることがよくあります。前回の『山ざと』にご紹介いただいた「金沢大学別刷特集」は私が担当したものでした。このときは「金大ワングルOB」の肩書？が大いに威力を発揮し、金大事務局との折衝では身内意識を持ってもらえ、スムーズに話が進みました。紙面に何人かの現役部員が登場していましたが、あれはまったくの偶然で、私も『山ざと』を見るまでは気がつきませんでした。

仕事の上でワングル人脈に助けられることは、しばしばです。今春まで「いしかわの自然百景」という月1回の連載を担当していましたが、これのネタの仕込みは19期の樺さん（県庁環境政策課）にずいぶんお世話になりました。15期の上馬さん（県白山自然保護センター）には紙面に登場していただきました。

このシリーズでは、ヘリに乗って地獄谷へ行ったほか、岩間の噴泉塔、白山のブナ林、白山のお花畑、ブナオ山など自分の好みでテーマを選定することができ、ワングルOBとしてのプライドをちょっぴり満足させることができました。

再来年は「祝／金大ワングル40周年」という広告特集を企画したいと思います。OB各位には名刺広告一口5万円の協賛をお願いいたします。新聞社に儲けさせるのはいやだ、とおっしゃる方は金大ワングルOB会の口座に振り込んでいただいても結構です。できれば20ページほどの別刷特集を出したいですね。

（了）

1 5 期同期会報告 清里・小諸編

第11回幹事 15期 佐野 哲雄

15期は特異な期であるらしい。スーパーレディーのOB会事務局長を輩出したことからだけでも判るかもしれない!?。現役時代の活動もさることながら、OB、OGになってからの活動や、特に同期会の開催に関しては、他の期と少し違うらしい。

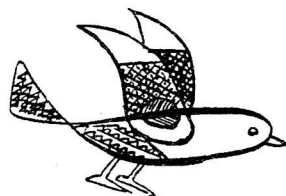
「…らしい」という婉曲な表現にしたのは、単に、筆者の情報不足かもの懸念があるため。「我が期はもっと特異性がある」という方は、是非、原稿を投稿して下さい。催促疲れの編集長には、何よりのプレゼントになることでしょう。

さて、今年の15期会は第11回を数えます。同期の結婚式が一段落し、仲間の突然の訃報（高村氏）に悲しみ泣いた年の、翌々年の昭和60年。第1回が私の生まれ故郷、愛知県蒲郡市の三谷温泉にて開催されました。

東海地区にいた16期の数名を含め、盛大に宴会を催した結果、翌朝にはびっくり仰天の請求。当初の会費以上の追加を余儀なくさせられました。以来、同期会開催時には、決まってこの話から昔話が始まるのであります。（ついでに、あの水車風呂は覗けたと、話も一気に急降下するのであります…ああ、おぞましい。）

そんな法外な追加請求にもめげることなく、翌年からも、担当幹事の汗と努力のおかげで、毎年趣向をこらした会が各地で開催されてきました。この間さらに二度も仲間の訃報（比田井氏、横井氏）に接しながらも、家族ぐるみの会へと発展・継続しております。

今年は、清里・小諸にて、11月3、4日の両日に行われました。参加者は11組20名。一時は50数名に膨らんだ参加者も、親離れ・子離れが進み、また親族・地域社会の中堅としてどうにも抜けられない立場になったりで、少々寂しい



数字となりました。それでも、卒業時の20名の過半数の家族が集まったわけで、これはこれでよしとしましょう。

「清里の森」は八ヶ岳の麓にある、山梨県が開発した別荘地です。落葉松や白樺の林に囲まれたその一画に、私の勤める会社の保養施設があり、これを利用すれば、第1回の汚名挽回（経済出なのに、経済観念のない幹事など…）ができる。しかも、ご無沙汰している比田井君の墓参りもできる…まずは企画賞といったところでありました。

山荘の定員は15名。20名全員を押し込むのも無理ではありませんでしたが、プライバシーを尊重し、希望者には近くのペンションに宿泊してもらうことにしました。ペンションの方を貸し切りに、と逆発想も検討しましたが、子供達が騒いでも怒られないの条件がクリアできそうになく、分散宿泊となりました。

年に1回ながらも、数回顔を合わせていると、子供は子供同士の絆ができ上がっています。新顔でも、親が心を許しているのがわかるのでしょうか、すぐに打ち解けて一緒に騒ぐようになります。子供達だけで親をシャットアウトの「宴会ごっこ」も始まります。真夜中のエレベーターの前で、懐中電灯で照らしながらトランプをやっていたとか、親顔負けの武勇伝も数々。しかし、この子達も、数年後には誰も参加しなくなり、その頃には「おじさん、おばさん」だけでどこかの湯治場につかっているのでしょうか？たとえそうであっても、スイスカヒマラヤのトレッキングをと、意気盛んに議論しあっているものと思います。

さて、幹事の苦労はまだ続きます。山荘には

管理人はおらず、夕食は昔ながらにみんなでワ
ンゲル料理でもと思いましたが、20名もの料理
となると厳しい。せっかく旅行に出てきたのに
やっぱり夕食作らなきゃいけないの？と、特に
女性軍から無能幹事と思われそうで、ペンシ
ョンでの夕食としました。元シェフのオーナーの
手によるフルコース（一応ガイドブックでは）
をペンションで一緒にゆっくり取り、懇親会は
山荘にまた移動して行われました。

近況報告では興味深い話がいろいろできま
す。震災の事、仕事の事、家族の事、海外旅行、
新築、借金、etc…。とりわけ、K君・U君の
両奥さんの話は、とどまることを知らず…両君
の狼狽ぶりが、またほほえましいものでした。
今回初参加の比田井さんや、子離れで単身参加
組になった高村さんの話にはやはりしんみりし
てしまいます。その後は、あいもかわらぬ昔話
や最近の趣味の話。波長のあっている仲間とい
うものは、とりたててどうということのない話
をかわしながら、心のマッサージをやっている
のでしょうね。清里の夜は更けていきました。
明日の好天を落葉松林の上に輝く星達が約束し
ていました。

翌日は、それぞれの宿泊場所で朝食。山荘組
は、朝食作りから、後片づけ、寝具の整理整頓、
部屋・浴室・トイレの掃除に、ゴミ集めと結構
作業がありましたが、実にスムーズに進みます。
見ていて、気持ちがいよいよほどうでした。やはり、
これはワンゲルで鍛えられたおかげか！

赤岳は名のとおおり朝日に赤く輝いていました。
そんな山並をバックに記念写真を撮った後、国
道 141号を北上し、小諸へ向かいます。途中、
旧国鉄の最高地点の野辺山に寄ったり、小諸駅
付近ではSLのD51が引く臨時列車を見たりで、
鉄道マニアのM君は満足そうでした。

駅の近くの、浅間山を望める墓地に、新潟生
まれの比田井君は眠っています。久しぶりの大
勢の仲間の顔に、喜んでくれたことでしょう。

墓参りの後、懐古園の入口の蕎麦屋さんで昼
食。久々に、蕎麦らしい蕎麦でした。予定して

いたのは郊外の食堂でしたが、時間の都合で急
遽キャンセル。この辺の段取りは地元の比田井
さんにお任せしてあったので、もたつかずに済
みました。

懐古園の散策後、来年の再会を期して解散。
幹事は宇野君で、余呉湖でキャンプするか…ま
あ、お任せです。連休の渋滞もあったけれど、
無事全員帰宅できたようです。メデタシ、メデ
タシ…。

で、終わりたいのですが、やはり懺悔してお
かないと、後で何やかんやと言われそうです。

（否、懺悔しても、15期の連中ですから、同じ
ことなのです。）

要するに、関西からのお客を名古屋で乗せた
ものの、まず高速の入口を選択ミス。さらに渋
滞に巻き込まれ、清里到着が大幅に遅れてしま
いました。山荘へ着いてからの準備も数々かか
えていた私は、M君の「駅へ着いたら、適当に
そこらを回って行くから」と言っていたような
…の記憶の方をあてに、つまりJR駅へ寄らず
山荘へ直行いたしました。ところが、彼女達は
「駅まで迎えに行く」と私が言ったの信じ、
渋滞で清里にも着いていないものと思って、山
荘への電話もせず、観光にも回らず、ひたすら
寒風の駅前で待ち続けていたというのです。彼
女達は、たまたま観光ついでに駅に寄ったU氏
に発見され、事態が判明…。「ドラブルが発生
した時は、そこを動かんのが山の鉄則や！」に
陳謝するしかありませんでした。決して忘れた
訳ではありません。勘違いしていただけないで
す。こんな時には、日頃は快く思っていない携
帯電話を用意しておけばよかったと思いました。

というわけで次回からの幹事の人材は、携帯電
話の番号をメンバーに知らせておいて下さい。

OB会名簿にも乗せましょうか、編集長？



連想＝高桑へのレクイエム＝ 台風、剣、高桑

19期 早川 大善

今から14年前、1982年の1月2日、吹雪をついて、それまでの長年の夢であった厳冬の剣岳の頂上に立った。早月尾根からのアタックであった。

当時、剣へは何度も行っていたが、早月はワングル時代に登ったきりで、実に8年ぶりの2回目であった。あたりまえのことだが、厳冬期、避難小屋（2000m）は白い世界の下だった。ただ煙突が危しく崩れ落ちているのが分かったのみであった。

その8年前の夏、金大WV時代、僕は初めて
の剣へ登った。

ダラの大西先輩を無理矢理引っ張り出してリーダーに担ぎ上げ、高桑と、1年後輩の深田、土田とで行ったPWである。高桑と一緒に行った山はそれが初めてだった。それまで、東北とか北海道とか白山を志向していた高桑が、どうとち狂ったか、初めて北アへ行く気になったのである。

前日、我が早川邸でひとしきりビールを飲んで、翌朝早く出発。台風通過直後の猛烈に暑い日だった。

トップは高桑である。それまでは”よくバテる高桑”というイメージを山田先輩（同期の山田のことである。途中で退部してしまったが、彼は「先輩、先輩」と言えば、先輩がケツまでも拭いてくれるか如くいつも「先輩」という言葉を連発する癖があり、反対に自身の敬称にされていた。）から聞かされていたが、どっこいモーレッツなスピードである。

”このままのペースで行けば俺がやられる”と予想できたので、大西リーダーに「ちと早い」とアピールした。しかし、ダラの大西先輩は

（依頼原稿に付いてきた「私信」なのですが…これがまた、おもしろい。早川 大善氏と、初対面？の方には、これも紹介しておいた方が、会報の目的に適うように思いました。

「判決。この沙汰により、これまでの返信なしの件を不問とす。一件落着！」）

舟田さんへ

11月16日

原稿依頼のきた時はこんなに寒くはなかったのですが、もう冬ですね。

大変遅れまして申し訳ありません。OB会報いつも楽しく見させてもらっています。

ところがどっこい、全くの不精者で、郵便物はいつも、さっと一瞥した後机の上にならず高く積んであります。そのうちぶつつんして、ある日まとめて捨てることになるのです。それで、ワングルOB会費とか、その他の連絡も恐らくしたことがないのではないのでしょうか？

まったくとんでもない奴なのです。でも、そういう無責任さとは裏腹に、先程も言ったように結構楽しんでいるので、見捨てられないだけの努力をしようと、忙しい中、必死でこの原稿を書きました。というより、探しました。

つまりこの原稿は、その昔、根に高桑のことを書いてくれと頼まれ（きっと、追悼文集を出すのだと思いますか）途中まで書いてあったものなのです。それもまったくの途中で、いつものごとく、そのままにしてあったのです。でもこれはぶつつんになった時もさすがに捨てる気がなくて、どこかへしまいこんでおきました。捨てた覚えはない、どっかへしまいこんだはずという記憶をもとに、家中をひっくり返し、ようやく見つけて、最後まで書き足しました。

以上のように、私としましては、ほんとに忙しい中、この件では「非常に努力をした」つもり（つもりだけ？）ですので、どうか遅れたことは水に流して、これからこんな私を見捨てず、連絡を下さい。

OB会活動ほんとうにご苦労様です。

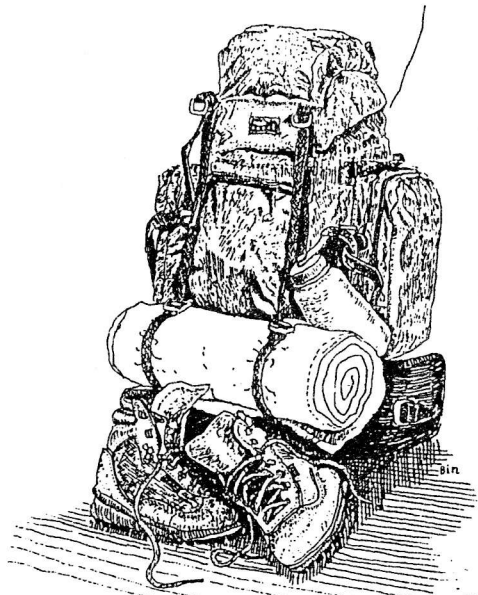
意地を張ったのか、高桑のスピードにストップをかけないで、「まあ付いて行け。」と言うばかり。そこで、ぶつぶつ文句を言って登る。

そのうち文句も出なくなってしまった。汗が10リットルも流れたらうか、とにかくひどかった。そして、ようやく樹林帯ももう少しで抜けようかというところ、突然に高桑のペースが遅くなり、とうとう避難小屋地点でダウン。正直言って”やったぜベイビー！！”ホッとした。

(下山して、皆同じことをあの時思っていたのだとわかった。) 高桑様々、そこで我々は高桑と一緒に、1時間以上も木陰で昼寝という特典を、鬼のような大西リーダーから得ることができたのである。

この最初の剣岳、そして高桑との山行は、標高2000mの避難小屋地点で、強烈な印象を僕に与えていたのだった。

その当時、避難小屋は、確かに立派に立っていた。



んでもないことが起きたことを知った。受けた大きな驚きと衝撃とが、半信半疑のままの僕を犀川ダムまで運んでいた。

搜索…。だが、ベルクハイムでの3日間は、高桑を探しに来ているというより、まるでワンゲルサロンであった。久々に会った連中と話が弾んだ。当然のことながら、高桑のことも話題に昇ってはいたが、まだこの事態への現実味がなく、悲しいというよりは懐かしみ、楽しんでいるかのようなようだった。きじうちに行った誰かが、小屋から漏れるローソクの灯が外の叢の中の空罐にチラチラと反射しているのを見て”ギャーでたー”とわめきちらして帰ってきたことにも笑いころげていた程であった。

3日目。何の手掛りもないまま休暇が切れていよいよダムへ帰るボートに乗ろうとした時だった。

長田さんと、佐野と僕の3人は、思わず何かに引き留められるように立ち止まった。

「あのダイバーが潜って、上がって来るまで待たないか？」と長田さんが言った。僕もそう言おうと思っていた矢先のことだった。迎えのボートを待たせたまま、3人でじっと見守っていた。

厳冬の剣を征服した僕は、続いてその年の夏、あのチンネを目指して池ノ谷より三ノ窓に入った。

ワンゲル2年の夏合宿”カノープス”での2日目のバテよりひどく、おそらく、山をやり始めて最高にくたばったのではないと思う。三ノ窓を前にして、足がどうしても上がらなくなり、池ノ谷ガリー方向から押し出される雪塊近くで大休止した。

その場所では、丹沢山岳会が、前年11月池ノ谷ガリーで雪崩遭難した3人を搜索中であった。逝った仲間を探している最中とは思えない程、和気あいあいと、バテた僕を尻目に非常に楽しそうであった。ふと、高桑の時を想った。

瀬戸(現 梶夫人である。あーあー、あの瀬戸がーである)からの突然の tel だった。デートの誘いかと嬉しそうな返事をしたのだが、と

長く感じられた。しばらくして、ダイバーが水の上に顔を出した。

「あったぞ!!」

その一言が、ワンゲル同窓会に参加したか如き我々に、おかれている状況を認識させた。空気が凍りついたようになる。半信半疑がついに現実となった。衝撃が、悲しみが我々を襲った。何かしなければ……でも、何をするのだ？

訳も分からないまま、その後の処理を長田さんと佐野とご家族親戚に任せ、僕はベルクハイムへ走った。ひたすら走った。ベルクハイムにはまだ同窓生が談笑していた。彼等が比重の重い空気に包まれるまでの時間は、ほんの一瞬だった。何も言わず村中が駆け出してしまった。

倉谷は、ほんの僅かの間に重い深い悲しみの空気にすっぽり包まれてしまった。

口の中に、山の草木を一杯に頬張り、鼻の穴にも泥を詰めて、蠟人形のように横たわっていた高桑をそこに残し、我々は迎えのボートに乗り込んだのだった。

高桑の体をご家族に渡すことができた、彼の引き上げを見届けることができた……そんな答えを持って帰れることが、深い悲しみをやわらげていることをほのかに感じながら……

そんなことを、疲労困憊の頭の中で思いおこしていると、ふと周りの空気が、まさしくあの時のように張り詰めたのだ。

何も聞こえないはずなのに、何故か緊張感が伝わってくる。そしてあの時とまさに同じく、瞬間にして池ノ谷の空気の比重は重く、そして冷たくなり、これからチンネを目指す我々のパーティーをも包みこんでしまったのだ。

思わず「何だろう？」と立ち上がって、雪溪の下部を見ると、丹沢山岳会の捜索隊が、先程とは別人のように、真剣な顔できびきびと動いている。そのうち、シートに巻かれた人影が、

雪の上に横たえられた。何人かが、悲しそうな気配でじっと見守っていた。疲労も重なって、心を暗くした日であった。

翌日からは、2日間雨も続き、結局チンネ左稜線の登攀をあきらめて、雨の中を三ノ窓より剣本峰を経て早月で下山することになった。

夏の早月を下りるのは、高桑達と来て以来のことであった。今度は夏だから、避難小屋は確認できるだろう。

注意して下った。思い出の避難小屋は確かにあった。しかしそれはもはや小屋ではなく、崩れ落ち、樹林の中に残骸をさらけ出していた。
”ああここで、高桑様のおかげで1時間も、トカゲできたのだ。”と少し懐かしかったのも束の間、そんなことはつゆしらぬリーダーは、そこでの休憩はとらず、一路馬場島を目指した。当時の我々は、目的とする登攀の前後途中は全くのアプローチに過ぎず、特に「後」は、ただ急いで下るのみで感傷に浸る時間もなかった。その頃には雨もやみ、再び夏の日差しが戻り始めていた。

その4年後には、14ピッチ、300mの岩壁を殆んど一人でリードして、ついにチンネ左稜線を完登した。その年は天候にも恵まれ、北条・新村ルートも殆どのピッチをリードして登攀できた。

その時はチンネの3ルートを登り、三ノ窓のベースを剣の頂上帽子雪溪へ移し、北壁登攀というのが当初の計画だった。しかし、台風接近のため、翌日以降より天候の悪化が予想された。憧れ続けてきたチンネ左稜線を登ったことで、一区切りついたこともあったが、台風＝高桑の連想が、夜のテントの中で僕の頭をかすめた。

翌日僕は、まだ真っ青な夏空の下で、即下山を決意したのだった。夏山 Joyの青空と白い雲に囲まれて、”ほんとに台風はくるんかいな”という心残り気なパートナーと共に、剣本峰経由で早月を下山した。

この時の早月は、本当に駆け下りた。誰もが

驚く程の短時間だった。あの避難小屋にも見向きもしなかった。後でそのパートナーから、翌日天候が悪化、三ノ窓から頂上へ向かっていたどこかのパーティーの一人が、長次郎のコルからの急な登りで滑落、死亡したことを聞いた。

もし計画通りにしていれば、悪天の中、我々も行動していたはずであった。台風＝剣＝高桑の連想の中から、高桑が抜けていれば、もっとチャンスにこだわっていたかもしれない。

彼は山の神の裳裾に控えて、僕を見守ってくれたのだろう。きっとこれからも…。



合掌。

あるOBの戯言

20期 栃尾 俊治

近況報告も出していない私に白羽の矢が当たり、「グループ薙の山行のことも何でも…」と舟田さんより原稿を依頼され、締切を10日も過ぎてこれを書いています。OB会設立時より他人事のように思っていた私ですので、この原稿を書くにあたり、とりいそぎ「やまざと」を読み、書いている次第です。

こんなことからOB会に対して力が入っていないことが、おわかりかと思えます。

みなさんは最近山へ行っておられますか？私の方とはいえば、ここ2ヶ月程仕事に追われ山へ行けず、苛ついている状況です。

私は以前より、OBとなっても山を続けている人が少ないことに寂しさを感じている一人です。「山とは？」と、現役の頃、一晚中語り明かした熱い思いはどこへ行ってしまったのか？と問い質したい。

確かに家庭を持つといろいろ束縛され、自由な時間がとれないこととは思うが、昔同じ気持ちで山へと向かった仲間としては残念である。

そんな折り、9月の中頃に、小桜の小屋で21期の竹本と出会い、学生時代以来の再会に、楽しい一夜を過ごすこととなった。ペンギン歩きに飄々とした風貌は昔と相変わらずで、今も山を続けていることに大変嬉しさを感じた。

下界での出会いも嬉しいものではあるが、山の上で、しかも白山の無人小屋ともなれば、感激もひとしおである。我々（グループ薙）同様にいまだに山へ足繁く行っている奴もいるかと思うと、俺も負けずにと闘志が沸いてくるものである。

OBの人達には、もう一度気持ちを奮い立たせ、山へ戻ってきてもらいたい。と同時に、現役及び新OBには、今の気持ちをずっと持ち、どんな形でもいいから山を続けてほしい。10年後、20年後出会った時

「山登っているか？」

との問いに

「ハイ、登っています。」

と答えてほしいものである。

私もこれから何年登ることになるかわからないが、OBとしてではなく、同じ山仲間として現役の人達と関わり、山の状況などを教えてもらいたいと思う。そして、決して私のために現役の捜索隊が出ることをのまないよう、心して山へ行きたいものである。

どこか山の上で会えることを、楽しみにしています。

いまだに山へ登り続けているOBより

（さてと、これでようやく今週は山へ行けるかな！！）

23期同期会報告

8月9日（金）の夜をメインに、23期の同期会を石川県白峰の緑の村で行いました。以前の会報でも一度紹介しましたが、23期はOBとなってからも何回も集まっており、若いうちは誰かが結婚すると、お祝いの大義名分で、数年前からは家族も連れてという事で、昨年冬に白馬乗鞍スキー場で、その前は立山山麓で行っています。さて、今回は21期の竹内さん、22期の桜井さんにもご参加いただき、全部合わせて12家族、40名が夏の白峰に集まりました。以下その内容について簡単に時間の経過と共に報告致します。

8月9日 15:00に現地集合ということで、それぞれ自家用車を使って三三五五集合一応1年半振りなので、ひとしきり現状報告の話に花が咲く。子供はというと幼稚園～小学校低学年がほとんどなので、それぞれすぐに友達となって遊び回っている。そうこうしているうちに、夜のバーベキューの準備と明日から白山へ登る家族はその食料の準備。アッという間に夕闇となり、バーベキュー場貸し切りのような状態で、大バーベキュー大会。ただ皆35才を過ぎ、昔のままのパワーとはいかないようで、買い出ししたビールと肉は少々余ったようですが……。バーベキューで腹一杯になったら今度は子供向けの大花火大会。これも少々数が多すぎたようで、あたり一面煙でモウモウ。やおら後片付けをしたり風呂へ入ったりして、その後は明日白山へ向かう家族（計5家族）は早めにおやすみ。残りの明日帰るだけの方は、夜遅くまでいろいろ語り合っているようでした。

次の日の朝6:00に白山へ向かう家族を見送り（注：筆者は残念ながら白山へは登らなかったの、白山登山の方の報告はできません。聞くとところによると南竜までは全員到着し、その日の晩はテン場でまた盛り上がったようです。その次の日頂上へ向かったかどうかは定かではありません）、朝ご飯を食べて解散ということにしました。

23期は地元でOBが結構残ったことや、気のいい人間が多いこともあり、卒業後の同期会を継続してやっています。仲間と酒を飲んだり、昔話で盛り上がったたりというのはいくつになっても楽しいものですし、今後も出来る限り続けていければいいなと思います。ちなみに次回（来年の夏頃？）は富山在住OB主催で、富山県氷見の海水浴とおいしい魚という案が有力なようです。

平成 8年11月

23期金沢在住OB

戸水・中川・名倉・鳥越



コジュケイ

MTBで通勤している。松本の西のはずれの田園地帯。10月末ともなれば、朝のいつとき、標高600m近いこの盆地一帯は放射冷却の霧に包まれる。収穫を終えた田畑の上を漂う乳白色のカーテンに下界はすべて閉ざされて、周囲の高い山々の頂あたりだけが、文字通り、浮かんでいる。

西空高くから安曇野を見下ろすのが常念岳。ずっと左へいった梓川の谷の奥には、緩やかな乗鞍岳の稜線。東の高ボッチの尾根が南へと低まった先、塩尻峠の上あたり、北岳と仙丈ヶ岳も浮かぶ。振り返って北の山々、爺ヶ岳、鹿島槍、五龍岳あたりはもう真っ白だ。先日の雨が山の上では雪だったらしい。

自身は濃い霧の中にいるので、なにか、とんでもない山奥に放り込まれたような錯覚に捉われる。気象条件にもよるけれど、このあたりではときどき遭遇する、山の気配が直接麓にまで降りてきたような瞬間だ。

同じ朝、通勤ラッシュに耐えている多くの人たちのことを想えば、この豊饒な景色を前にできるのはずいぶんと幸せな話だ。東京や大阪では働かないとする選択は正しかったという実感が、この朝のいつときばかりは、ゆるぎないものとなる。

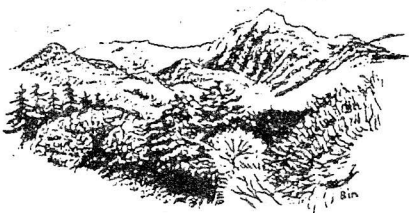
*

現実に戻らねばなるまい。

事務所へ一歩踏込むなり、生気が失せていくのがわかる。この一年半ばかりのあいだ、ともすれば頭をもたげてくる、どこかで自分を欺いていないかというつぶやきをどうにか押しとどめて、今日も仕事の顔になる。

考えようによっては、自分の机があって、とりあえず、朝、そこへ出て行きさえすれば日常が始まっていくというのはラクな話だ。それを繰り返せば一年になり、ボーナスもあたる。

その対極にあるような暮らし方、つまり、昼



近くに起きて、はて今日は何したものかとひとしきり考えて、結局は、桜湯に行つて、ニュー三久に買い物に行っただけで一日が終わるというような生活をずいぶん長いこと送っていたばくは、あれはあれで気楽だけれども、気持ちの深いところは結構不安にかられる日々だったということもしっかりと覚えている。

そんな意味での不安は、悪い物が落ちたかのように、今はない。

そして今の仕事も、少なくともその断片を切り取って見るだけならばそんなに悪くない。事務系の人たちに比べれば、気詰まりの多い部屋を離れて外へ出られる機会はずっと多いし、図面を描くのはいかにも技師という感じがして心地よい。2.5万分の1地図を見たり、航空写真を調べたりするのはもともと得意なほうだ。さして意味があるとも思えない書類など、さっさとハンコを押して回してしまえばよい。

それではなぜ？ 喉の奥に小骨がつかえたままのようなこの不快感はいったいどこからくるのか——もちろんそれははっきりしている。

林道を開けるということへの抵抗感。

山を刻んで車道を通すという事業に対しての、拭い難い不信感。

それをずっと考えていた。林務課林道係というところで仕事をし、給料を貰いながら、根本のところではそれを全否定している。「踏み絵」という言葉が、それほど場違いな響きを伴わずに、頭にちらついたりした。

*

もとより、ぼくの場合は就職動機が不純だったような気もする。専門知識があるわけでもないのに、イメージとしては、林業試験場のようなところで、樹木の種子発芽試験とか、マツタケの現地適応化調査とか、そういったことをマイペースでやれたらというのがあった。余談だけれど、たいていどここの県でも林業試験場というのは山の麓の気持ちのいいところにある（鶴来の樹木公園を散歩したことのある方はお分かりでしょう）。それもひそかな魅力だった。

しかし現実には、県の試験の「林業」に受かった者が配属される可能性として圧倒的に高いのは、治山・林道の部門なのである。わかりやすくいえば、山の中の土木工事を受け持つセクション。長野県の場合、林務部関係の職員は本庁、出先を合わせると400人強（この数字からしてすでに、なりわいとしての今の林業の規模を考えると、異様な数だと思える）いるのだが、このうちの実に3分の2以上の職員が治山・林道

に携わっているのである。予算でみるとそのウェイトはもっと重くなる。それに比べると、ふつうの人がイメージするところの林業的なもの、造林や間伐への予算づけなどほんとうに微々たるものだ。

そしてこのことは、長野に限らずどの県でも同じであろうことは容易に想像がつく。なぜか。元締めである林野庁の考え方がそっくりそのままだからだ。この役所の国有林や林道をめぐる節操のない考え方は、白神山地の話などでも知っていたから、ぼくは国家公務員の林業職にパスしたときもそれを蹴った。一本すじを通したようで気分がよかった。

ところが県庁とて事態はまったく同じなのだ。県が管轄しているのは民有林、より里に近い森だ。それぞれの土地で山仕事をしたり、森の手入れをしている人たちの意見を聞き、サポートしていくのがその役目だと当然思う。けれども実体は、国が用意したメニューをただ当てはめて黙々とこなすだけのミニ林野庁と化している。中央集権国家ここに極まるという感じ。

具体的な話。松本から長野へ抜ける篠ノ井線沿いに、ぼくの担当する村がある。大きな事業の予定がないという理由から一年生に任されたいが、村の一番上流の集落で下水道を引くことになり、それを林業集落排水事業という林野庁の補助事業を受けてやることになった。山村の生活環境を整備することにより若者の定住化を促し、林業の振興、ひいては山村の活性化につなげるという趣旨からして、なにやらマユツバだなどと思わせるのだが、とりあえずそこまではいい。やっかいなのは、事業費の2割は林道に使いなさいという縛りが入ることだ。もとより村役場の担当者も下水道のことしか考えていなかったから、これには困った。申請期限も迫っている。役場の人と2人して急ごしらえの林道線形計画を地図に引っ張って提出したが、そんな林道に具体的な使い途があるわけもない。

この村の周りには、アカマツやコナラを主体にした、いかにもふつうの雑木山。かつては薪炭材を山に求めることもあったろうが、今はときおり、地元の人がキノコ採りに入る程度の静かな里山だ。そこへ無理やり、役所の考える「林業」を持ち込もうとするから話がどんどんいびつになっていく。

建設会社かにかのC.Mに、「地図に残る仕事をしているお父さんはスゴイと思う」と娘が言うのがあった。ぼくの場合で言うなら、石仏と観月の名所として知られる小さな村の里山の一隅に、無用の長物を刻んでしまったという苦みは、当分の間消えることがないだろう。



アオバズク

*

なにやら内部告発ルポめいた話になってしまっていていけない。「林業の現場ならではの声を」というのが舟田さんからの依頼だったのに。

残念ながら、役所は（中央の）役所向けの仕事をするのに精一杯だから、ふつうに山仕事をしている人たちの声を聞くゆとりがない。逆に、自分の山や森をよく見て、そこに一番あった作業を実践しているような人たちは、はじめから行政の画一的なマニュアルなど信じていない。山の作業路も自分たちでつくる。（大町で、天然の落葉広葉樹の山を手入れして、新しい薪炭林の形を模索している荒山さんという方の森を、一度見に行こうと思う。）

役所が推進する無目的な林道事業に対して、そのうち必ずどこからか異議申し立ての声があるものだと、ぼくは思っていた。ところがそうだったことはほとんどない。理由として、林道工事が年々奥山へと進んでいって、今ではほとんど人目につかないような所で黙々と行なわれていること、山麓の集落に人がいない（役所言葉で言うところの不在村者が増えた）ので、チェックのしようがないこと、などがある。けれども何より大きいのは、今のところ、山あいの村での一番の収入源が、こうした公共事業による土木工事であることだ。

現場で工事のおじさんたちと昼飯を食べながら、ときにはそんな話になる。「こんな道つくってどうするんだろう」ぐらいのことは、みんなうすうす感じているのだ。そこいらの公務員なんかより、この人たちは政治を見る目も数段鋭い。でも結論としてはこうなる。「それでもむしろ食っていかにかやならんから」。

つい先日の衆院選の結果も代り映えのしないものだった。ともすればまた、経済テコ入れ、不況対策と称して補正予算が組まれ、公共事業がばらまかれるだろう。そうなればこの林道〇〇線はさらに1千万円の増工だ。ぼくらは山を削るために図面を引き、森を壊すために残業だ。現場の人たちもまた、雪がくるギリギリまでブルドーザーを動かし続けるだろう。

つまるところ、あれこれ言ってもこの国の公共土木工事依存のシステムは当然変わる気配がないし、今に始まったものでもない。そして、なにやかにやアドバイスめいた声も聞こえてくるのである。結局、おまえが言ってるのは、企画をやりたかったのに営業にまわされたというような、よくある新人の葛藤とおなじではないのか？と。樹木やキノコの名前を知る代わりに、コンクリートブロックの安定計算なんかをやらされているための愚痴ではないか？と。「仕事の表面上は悪くない」のだったら、そこだけを見て、働き続けていくよう自分をコントロールしていくのが社会人だということくらい、27にもなってまだ気がつかないのか？と。

——本当に、そうだろうか。

*

前にも言ったように、金沢での後半の3年間（通算7年いたうちの）、ぼくはかなりのんびりと暮らした。もうすこし、何かまとまったことをやれなかったかという気がしなくもないが、いまさら仕方がない。

ただ、山だけはよく歩いた。ワングルの仲間を誘うのも気が引けるような、石川・富山・飛騨地方の不遇な低山へ、好んで一人出かけた。

——麓の村の、たんぼの脇の仕事道がそのまま尾根へと続き、いつしかそれは春の堅雪の下へと消えていく。ウサギの足跡を追って高度をかせげば、周りの雑木林はやがて幹周りの太いブナの森となり、ほどなく隣村とをへだてる頂稜の一角に飛び出す。ピークは厚い雪の下。思いがけないほど近くに、白山とそれに続く山々、目を転ずれば立山連峰も、東の空にくっきりと浮かんでいる。——

それで満足して、弁当食べて下りてくるというだけの、他愛のない山歩き。けれども、往き帰りに通った村の様子だとか、麓から見上げた尾根の緩やかな形だとか、静かな低山ならではの情景を、折に触れて思い出す。いわく説明し難いのだけれど、単なる一趣味として片づけてしまうほど軽くはない、思いのほか深いところで後々の自分に効いてくるような時間だった気がする。暇だったこともあるが、そういう山のことをいつも考えていたせいだろう。

山の往き帰りに目にした廃村の数々。そこを再度訪れ写真におさめ、また元住人を探しあて、かつての山あいの生活を聞きとる。こうした地味な調査を、富山の山好きな人たちの有志がまとめた、『村の記憶』（山村調査グループ編／桂書房刊）という本がある。豪雪と生活の不便、ダム建設による水没と、村を閉じなければならぬ理由は様々だったが、いずれにせよ、炭焼きをはじめとする山仕事を主体にした山の暮らしの価値を、社会全体が認めなくなっていった。昭和30年代後半から40年代にかけて、実に多くの山の村の灯が消えていったことがわかる。学校も、神社も、お墓までもが山を離れた。ぼくが親しんだ山の麓のそこここにも、そう遠くない昔、子どもが走りまわり、夕餉の煙が立ち昇る暮らしがあったのだと、あらためて思う。

「桂よ、さよなら。あけび、ぶどう、くるみ、なめこ、さようなら、桂よ」（西赤尾小学校桂分校の閉校式での『桂の歌』）

*

あまり顧みられることもないが、世の中のうちねりとともに、多くの山あいの地域がそういう変遷を経てきた。林道建設の促進→林業の振興→山村の活性化、というような安易な図式をにわかには信じられないのは、そのあたりにある。基盤整備などと称して、道やダムを作れば何かがおこるという考えは、結局は幻想でしかなかったし、過疎を食い止めるどころか、山里の暮らしを動揺に陥れるだけだった。26年前、二人の生徒を送り出して閉校した桂分校のあった同じ五箇山に、こんどは高速道路が通るといふ。人形山がグレンデに変わり果て、数年後のワングルは、冬合宿の舞台をまた別の山へと探し求める、といった事態にならない保証はどこにもない。

*

山あいの地で、心穏やかに暮らすということ。今また、そういう価値観を人間が取り戻しつつある（田村さんの試みを、みんなどこかで羨むように）。かつての村跡でも、草を刈り、水を引いて、季節のいいときには山の暮らしを選ぶ老夫妻などがいるという。

人はまた山に戻るのだろうか。



熱い大地の想い出話

33期 西村 かおり

皆さん、ただいま。パラグアイから8月に帰ってきました。

2年ぶりの日本に戸惑いながらも、ワングルの仲間や山々は全然変わりなくて、ほっとし、うれしく思っています。2年分のブランクを埋めるべく、今年は秋山に行きまこうと計画していたのですが、裏剣に行き、捻挫をして現在療養中（山は変わっていないくても、体力、筋力は変わっていた…）。

山は変わらないと思った一方で、今回山小屋ベルクハイムの変わりようには驚いてきました。が…。帰国し、同期で集まろうということで金沢へ行き、ついでに（！？）小屋作業、兼小屋見学、兼高三郎登頂をしよう…という計画でした。が、あいにくの雨。それでもしっかりと雨の中、慣れないツルハシ、鍬なんぞをふるって（ホント！？）仕事をしてきました。報酬の酒場が待っているにも関わらず、私の同期達は、現役の引き上げが決まり、若い女の子達が下りてしまった時点でやる気をなくし、日帰り下りていってしまいました。（重いザックを担いできたというのに。私の帰国の方はダシだったのでしょか。私は彼等の分も含め、教祖様のお相手を務めました。田村大先輩の福井時代のご勤務先が妹の行っている会社だったと分かり、福井弁も懐かしんでいただきました。）

そうそう、そういう話を頼まれたのではなく、題にもあるように、皆様の税金（もちろん私も払っていた）を使って、青年海外協力隊員として派遣されたパラグアイでの2年間の想い出等を書こうとしていたのです。

何せ私は作文がすごく苦手で、題だけは早々に決まり「暑い」じゃなくて「熱い」（亜熱帯で、半年以上は夏で、40度を越す日が多い）なんてかっこいいじゃない…から、肝心の本文にとりかかるのに、1か月以上を要してしまい

まして…。さて、何を書きましょうか。

まず、パラグアイの基礎知識から。南米大陸のおへその部分に位置し、面積は日本の約1.1倍。人口約410万人。牛口800万以上。農牧業国です。余り知られていませんが、約1万人もの日系人が暮らしています。山も海もなし！！ただ、真っ平らな国。公用語はスペイン語とグアラニー語。そう、私はスペイン語が話せるのです（もちろん今の所役には立たず、日々忘れているのですが）。そして、首都はアスンシオン。そこの教員養成校（大学の教育学部みたいな所）で、理科の実験授業を受け持っていたのです。仕事の苦労話は多々ありますが、それはおいおい話すことにして、今回は毎日の生活に欠かせないお茶の習慣「テレレ」についてご紹介しておきます。

お茶そのものは、インディオ、グアラニー族の薬用飲料であったマテ茶（聞いたことがあるのでは？）を使い、それに薬草を入れた冷水を注いで飲みます（冬でしたら、熱くして飲みます）。このお茶を一日に何度も（仕事の合間にテレレをしているのか、テレレの間に仕事をしているのかわからないほど）、何杯もおなかチャブチャブになるまで飲むのです。なんでも、野菜を食べる習慣のないパラグアイ人達は、このお茶からビタミン類を取っているのだそうです。

テレレのやり方にはルールがあって、涼しい木陰で、家族や友人とともに、丸くなってテレレ椅子に座ります（どの家にも大きな、背もた

テレレセット



薬草入水エシ(2L)



(プラスチック製)

れが倒れているテレレ椅子が必ずあります)。大体、年下や女の人か給仕係になります。ポットに水と氷をたっぷり入れます(田舎で飲めば、濁った井戸水、虫がうかんだ水の場合もあります)。グァンパという木や、牛の角製のコップにマテ茶(ジェルバ)を入れ、氷水を注いで、ボンビージャというストローで飲むのです。最初は自分(苦い!)、次は隣の人、また隣というふうに回し飲み。回ってきたら、全部吸わなければならないし、前の人か知らないおっちゃんであっても、ボンビージャの口をぬぐってはいけません。

何(十)周もするとおなかも張ってきて「グラジオス(ありがとう)」と言って輪から外れます。給仕係は輪の中の誰かが飲み続ける限りは自分も飲み続けなければなりません。私はよく、一杯の量を少なくしたり、飲む真似だけをしていました。

このテレレ、社交の場としてとても重要で、単調な毎日の生活の中で、いろいろな噂話、失敗話、笑い話、政治の話と、たっぷり情報交換をし、交流することになるのです。

ホームステイ先で私が初めてテレレの輪に入り飲んだ時、家族はじっとみつめたものでした。パラグアイ人の生活に溶け込むには、また、仕事をスムーズに進めていくための人脈作りにも、テレレへの参加は不可欠でした。最初は、知らないおっちゃん達との回し飲みや、井戸水には抵抗がありましたが、慣れると毎日飲まずにはいられなくなっていました。

困ったのは、授業中でも生徒が飲みながら人の話を聞いていることで、禁止令を出しはしましたが、暑い夏などはなあなあになってしまいました(とにかく暑くて、勉強も仕事もやる気が起きてこない)。

このテレレセット(グァンパ、ボンビージャ、ジェルバ)を日本へ持ち帰ってきたのですが、回し飲みする仲間がいません。家族でと思っても、1時間もテレレすることは不可能でした。いいところ2-3杯。それぞれに忙しいし、せいぜい二人。それも回し飲み抵抗があったり、少し癖のある味が不評であったり、結局一人で飲んでます。でもそんな私もおいしくない。やっぱり外で飲まないと…。やはり、あの原色の広大な風景(赤土の道、青い空、大きな緑の木、原色の花、etc)がないと、おいしくないのだとわかりました。ああ、またおいしいテレレを飲み、パラグアイへ行きたくなってきたよー。

こんなテレレの習慣からもわかるように、パラグアイの人達は働き者ではありません。肥沃な土地からは主食のキャッサバ、牛肉や果物も世話をやらずに食べられ、食うに困るということがなく、ともかく暑く、のんびりなのです。かつかつ働くことはなく、もちろん残業もなく、その日が過ごせればよいのです。日本と比べれば便利ではないけれど、楽しく、気楽に、素直に生きていると思います。

こんなパラグアイの生活にどっぷり浸かってきた私。あくせく働く気も起きず、いまだにぐうたらしている状態です。日本での社会復帰にはもうしばらくかかるようです。

もっともっとパラグアイでの楽しい話があるんだけど、次の機会に。

テレレを試したくなった人、福井に来て下さい。たっぷり用意してあります。写真もあります。それでは、ひとまずこのへんで。